
アナアナ。

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナアナ。

【Zコード】

N61111V

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【ホラー／短編】 今日はカレシの「ロードブール。 昨日約束したんじやん。だから、今からその待ち合わせに駅まで向かうんじやん？ アタシは、穴に落ちてつた。マジで…？ 小説家になろう『夏のホラー2011～夏の夜には怪談を～』企画参加作品。怖くありません。

(前書き)

ギャル視点、ギャル口調、ギャルホラー。
…
アリビ。

暑一^{あつ}。今日はカレシ（彼氏）の「ロードプール。昨日約束したんじやん。だから、今からその待ち合わせに駅まで向かうんじやん？ 急いでないけど、携帯電話見ながらで忙しいつーの。

そうしたらさ、歩いてる途中だつたんだけどさ。道のド真ん中にお金、落ちてたんじやん……。都合いいことにイ、周りは誰もいない、住宅ばかりで人間はアタシひとり。アタシしかいない。

アタシ、それと見つめあつた。約27秒くらいかなア、アタシはお金を拾おうとした。万札1枚だつたけど、誰だつて見つけたら拾おうとするじやん。違うワケ？ アタシだつて例外じやないしイ……とにかくさ、拾おうと手を伸ばして前屈みになつたワケよ、そうしたら。

フザけんなつてのね、突風が、いきなり奇跡みたいに吹いてさ。すくい上がるみたいに、万札の奴、風で飛んでいつちやつたつてワケえ。うつわー、信じらんない！ つて呆気にとられたつてーか。でも、でも、よ。でもでも。

アタシ、追っかけた。逃げる万札、追っかけるアタシの鬼ごつご。光景は想像にお任せするけど、アタシは万札のヤローを追うために、道の脇から外れて、広がつて荒れ放題になつてている空き地のボーボーとした草かき分けて、続いていた山道へ入つて行つた。すぐに戻つてくるつもりで肩からぶら提げていた、水着の入つたバッグを適当にその辺に放り出して、林のなかに潜つて行つた。何処だ万札、晒せ万札。お姉さん痛いことしないから出てきてよ、つてさア、アタシは見失つた万札君を探していった。

それからすぐよお。アタシ、ドジ踏んだ。突然、足元が無くなつた。

地面を踏んだつもりだつたけど、消えた。足場が無い。アタシは、穴に落ちてつた。マジで！？

自分がどうなつたのか……ぜーん然わかんない。アタシ、ひょつとしたら死ぬの。まだ16（歳）じゃん……。

気がついてゆっくりと目を開けたら、周囲は暗かつた。ひんやりとした壁が体に当たつていて、湿気が気持ち悪いんだけどーもとーいちイ、と暫く所在が分からぬせいで頭おかしかつた。アタシ、どうなつちゃつたんだろう。ます。

「ちょっとオ……」「何処ー？」

擦れたけど、声を出した。頭痺てる？ 起き上がれないじゃん、どうなつてんの。

「誰かアー」

もう一度、声を。声は、反響している気がする。狭い所にいるんじゃね？ 場所もそうだけど、今が何時で、気絶してから何分だから時間だか経つたのか、分からぬ。携帯つて持つてきただけ、バツグのなかだつたつけえ？

それより、体が動かない。ヤバくね？

「こんにちは」

はア！？

声がした。アタシ、死ぬほど驚いた、背筋が凍るほど。「ひつ」

慌てふためいた、心中で。

「怖がらなくていいよ。オレは許斐^{じゆひ}といいます。氣だけは若いサラリーマンん」

こんにちは、に続いて何処かからした声は、陽気そうにアタシに話しかけていた、でも語尾が震えている。「誰だオツサン」アタシはたぶんけど真っ青になりながら暗いなか、声に声で返した。ユーレイだつたらどうしようつてーの。

「人の話を聞こうね。オレは「ノノミ、ノノミちゃん。安用給だけど建設会社で平日頑張ります。土日はホリティー、でもカミサンと息子に殴られます。誰か通報して」

オッサンは冗談を言つてゐる。何したのか知らねーし笑えないし力ミサンと息子にボロられようが何されよーが、アタシには関係ないんじやん？ それより、オッサン、アンタ何処にいるのさ？ におい嗅いでもオッサン臭の気配は無いし。よく聞いてたら、声つてアタシのすぐそばでしているような気がするんだけどー。どうなつてんの？

「君はね、穴に落ちてゐるんだよ。で、ケガはないかい？」
オッサンが聞いてくる。

「穴ア！？ ……やつぱりね」 穴に落ちたっぽい所までは思い出せるんだつつうの。

「でも、動けない」

アタシはため息をついた。頭がぼうつとしてる。「ははあ、ケガしてるみたいだね。それで、身動きできないと。そりや大変だ」 人事みたく言つてんの。

「オッサン、何処にいんだよ」

アタシはイライラしながら言つた。

「えーとね。詳しく述べ端折るけど、要するに。オレも『隣の穴』に落ちたみたいでね」

「はア！？」

「同類ですね。はつはつは。で、君を追いかけてあげた親切の拳句にこんな羽田になつてしまつたオレへ、温かい言葉と毛布はな

いかい

「ねえよ！」

アタシは呆れた。

「キツイなあ。もつちよつと優しく言えない? 女の子でしょ」

「放つとけよオッサン。よけーなお世話」

「君の親はどんなだかね」

「親ア? どーでもいい」

元気よくオッサンに返していたら、急に会話が止まった。何だオッサン、さつきとは逆に、声がないと気味が悪いじゃん。「君の親御さんは、君に冷たいのかな」待つていたら、オッサンは続けた。「親なんて知らね。親なんて自分のことばつかじやん? アタシが外泊しょーと誰と付き合おーと、夜はいなしし知りもしないし『知ろうと』しょーもしない」アタシは舌がもつれそうになつた。「親が勝手だからアタシも勝手にすんの。別にいいんじやん。何か悪い?」

アタシの親は両親とも夜はいない。オトンは仕事だらーけど、オカンはさアね。たまに帰ってきてるけど、挨拶だけ交わして、よそよそしいっていうの。避けられてんじやないのつて。避け……あー、アタシの普段の格好、マンバじやないけどそれに近いからそれでかな。今の格好は、プールにいくからつてそこまで化粧塗りたくつてないし、どー見ても普通の学生じやん?

だーアれも怒らないんじやん。だから好き勝手やるんじやん?

「毎日楽しいかい?」

オッサンは聞いた。

「べつにイー。楽しい時は楽しいけどー」アタシは眠たくなつてきた。

「楽しいとこ悪いけどね、君。君、このままだと死ぬよ」

「突如、オッサンが怖いことを言つた。は?」

「考えてみて』』らん。君とオレがここにいることを知つていいのは誰もいない。オレが気がついて君を追いかけてきたのは、立ち入り禁止になつてゐる山に君が入つていくのをたまたま見かけたからだ。禁止になつてゐるのを知つてゐるのは近所の人だけだらうけどね。」

でも、看板が何処かになかつたかい？」

「さー……」

「（）も古い所だから、看板は外れて何処かへいつてしまつたかもね。まあいい、それより、君はケガをしている。見えないから症状も何も分からぬけど、もし骨折でもしてたら熱も出るし、時間が経つと腹も減る。間違いなく衰弱していくし、助けが来ないと事態はどんどん一方、悪化するさ。さーて、どうするんだ？」オッサンは挑戦的にアタシに言つた。「どーすんだって……」

体は動かない。どーもできないじゃん。

「アタシ、死ぬワケ？」

アタシは聞いた。足に違和感つていうか、足が痛い気がする。動かしてみようかと思つたけど、オッサンの言つ通り、骨折でもしていたらと思うと、怖くて動かしたくない。

このままの状態がずっと続くのかつてーの？

「オッサン、聞いてんの？」アタシは不安になつた。

「聞いてる聞いてる。ま、君のことも考えてはいるが、オレも穴から抜け出せなくてどうしたもんかと考えてたとこ。なーんにも出来ないしなあ……」

オッサンの困り顔が思い浮かんだ。「オッサン、ケガは？」「大丈夫」「あ、そう。ならいいけど」自力で這い上がれないほど深い穴つてー、早く埋めちゃえばいいのについていうか。アタシもオッサンも何て不幸。

「つまんない人生だつた」

アタシは早くも諦めモードになつた。「アタシ何で生まれてきたんだろ」そんなことを呟いた。アタシがどういう風に生きてどういう風になつて、どういう女になろうとも。他人には関係ないしアタシも他人には興味ない、つていうか。無関心、つていうの？ いつからかそんな風になつた。

「無関心な親からは無関心な子どもが育つんだよ。そりやそうだね。君に思い出はあるかい？ 何が一番楽しかつた？」オッサンがアタ

シに聞いてくる。「一番は……」一番、と聞かれても分からないんじゃね？ とアタシは考えながら、自分の記憶のなかを辿った。

夏、海へ行つたつけなア、親たちと、親戚もいたりして、賑やかだつた。釣りもしたし、溺れかけてサーファーに助けられたことがあつたじやん。オトンは気ままに蛸釣つて、アタシがそばで溺れるつつのに気がつきもしなかつたつて、後でオカソに怒られてた。秋、小学生だつたつけ、運動会が終わつた後だつたと思うけど、ちよつといい感じじやんつて思つてた男の子に告白されたんじやん。アタシ、すつごく嬉しくて舞い上がつてたけど、震災が起きて男の子はそのせいで転校しちゃつたんじやん。あれは悲しかつたつけるア、ずっと泣いてたしイ……あア、震災つていえ、ゴローの奴、被災地に行つてたんだっけ。

「アタシも被災地に行けばよかつた」

オッサンの問いかけを無視して、アタシは思いを口に出した。「そうすれば、ちよつとは生きててよかつたつて思えんじやん？」アタシのカレシは偉い奴で、3月11日に起つた大地震の時に支援団体つてーのに交じつて北陸に行つたんだつて。

もしアタシがその時に一緒にいたなら行つたかもしれないけど、あいにくアタシがゴローと知り合つたのはもつと後。夏前なのに真つ黒になつて帰つてきました、なんて言つてフザけて笑つてた、それで惹かれたのかもしれないけど。『サンデマンデコー』つていうカフェでアタシら出会つたつけなア、つい最近のことだけど。

「地震か。オレもね、被災したんだけど、変な話、もしあれが無かつたら、死んでいたのかもしれないな」オッサンが奇妙なことを言い出した。

震災で死ぬんじやなくて？ どういひこつた。

「あの時はね。仕事も家庭も上手くいかなくて、躍起になりかけていた時期だつた。そんな自棄な時に震災だらう。皆が皆、協力し合

わなければ生きていけなくなつた。ひとりで過ごしている時間より他人と共有している時間が主になつてしまつて、でも、その時に過ごした時間の方が、『あーオレつて今日も生きてんだなー』つてい氣分で実感できたつていうかね。それまで躍起になつてひとりで解決しようと、あーだのこーだのとカミサンや息子、上司や後輩たちにわめきちらしてたり偉そうになつていたオレ……馬鹿らしさっていつか……恥ずかしくなつたんだよ……』

オッサンはアタシに愚痴り出したけど、アタシは、どつかでオッサンに少し同感してる。

テレビの向こう側では必死な人がたくさんいるつていうのにさ。他人なんて関係ないなんて言つといて、でもアタシ何やつてんの？ つて、ちょっと思つてる。

震災が外国だつたらどう？ 日本じゃない行つたこともない国的话题で、アタシこんな風に思つた？ ゴローみたいに現地に行こうとした？

無関心つて何処までで、どうなんだ、つていつか。

アタシつて何で生きてんのー？

アタシの叫びは誰の関心も向かない。ただ吠えてるだけ。生きたけりや生きなよ、つてさえ言つてくれない。無関心、そんなのつてある？

素通りたくない毎日。アタシは今日、カレシとプールに行くはずだつた。

こんな所で死ぬんじゃない。

アタシは、死にたくない。死ぬ実感がわかる。プール行きたい。ゴローに会いたい。

もつと先が分からぬ代わりに、目先のことだけはとにかく考えられるんじやん？

「もつと早くに気がついたら日常も違つたかもしねないけど」と
オッサンは言った。

「生きたいことやりたいことがあるっていつことだし。助け出されたいいね、君は」と、オッサンは続けた。

「オッサンしつかりしなよ。よく知らねーけど、今は死にたくないんだろ?」

アタシはハツキリと言つてやつた。オッサンは無言で、それから返事した。「うん」

不思議じゃん。オッサンとアタシ、自分の話をお互にぶつかるだけなのに。

これで明日の見方が変わつて。死にたくなつて思つよつになつた。変じやん、アタシたち。キョウウコウ、つて 不思議。

ところが、つてやつ。

「オッサン、アタシ眠い」

「おや」

「何だろ、すく睡い……」体が言つことをきかない上に、眠気が襲つてきた。手を上げたいけど、力が入らない。どうなつていくんだ、このまま、アタシ。

「祈つてるよ。君が助かるよつよ。……祈つてる」

アタシの隣、壁の向こう側になるんだらうけど、隣では、オッサンがアタシを励ましてくれた。

「アリガト、オッサン。つていつか、アタシ……」朦朧としてきた頭で、これだけはもう一度強く思つておいつと決めた。「死ぬ気ね

ー

今は眠いから眠るだけつーの。おやすみ。アタシは、目を閉じ

たつもりで、……閉じた。オッサン、アタシだけじゃなくて、アンタも助かるよ、アタシも祈ってる。お互いがお互いのことを思えるつて……よくね？

おやすみ……

……アタシ、夢を見た。汚いコート着たみすぼらしい格好の見したこともないオッサンが、倒れた家屋のなかからオレンジ色の服着た救助隊みたいな人たちに助け出されている所。色が鮮明についている夢だつたんじやん。美しい、つてーの？ 銀杏の散つた並木があつて、救助隊の人たちの口から薄く息が白く吐かれて。秋の夕暮れでキラキラ輝いていて、絵に描いたように幻想的じやん？ 何でか美化されてんじやん？

オッサンの綺麗な夢が、アタシにうつったのかなっていうのか。ともかくオッサン、何でこんな夢見せてんのか分からぬけど、元気出せよな……

アタシは目を覚ますけど、白い世界にすぐには馴染めなかつた。目を開けると建物の天井があつて、そのまま横を見ても、白っぽい。それから鼻につく薬品みたいなニオイ。後で来た看護士のお姉さんに教えられる前に、ここが病室だつてことが自分で分かつた、つてワケ。病院じやん。

記憶は何ともなくね？ 覚えてる……アタシ、穴に落ちてたんだ。

「先生を呼んでいますからね。落ち着いてね。ここは病院だから安心して。アナタ、助け出されて3日間眠つていたんだから」

アタシが寝てこるベッドの横で看護士のお姉さんは、微笑んでいた。

「あのオ」

「ん?」

「アタシの隣にいたオッサンは? どうなったの?」

アタシがそう聞いたら、お姉さんは困った顔をしてんじやんか。だから、あれ?、つてなつた。

「隣つて? オッサンつて誰のことかしら?」

「だからー、アタシが落ちてた穴の隣で、アタシと同じように穴に落ちてた惨めなオッサン」

アタシ、ちゃんと説明したんじやん。だけどお姉さんは、ますます困惑した顔でアタシ見てる……。

「何のことかしら……助け出されたのは、アナタひとりだったけど?」
そう言われて今度は、アタシが混乱したんじやん。あれ? どうなつてんの?

アタシは幸いにも骨折だけで済んで、入院していただつてんじやん。仕事先から、アタシが目を覚ましたつてんで慌てて飛んできたっぽいオカンが詳しく教えてくれたけど。アタシは、携帯電話を穴に落ちる前に何処かで落としてたみたいで、着信音が鳴り響いて気がついてくれた人がいたらしいってさア。ラッキーってやつ。

でもまア、気がついてくれた人つてのが近所の子ども（ガキんちよ）で、携帯に電話かけてくれた人つてのがカレシ。アタシが待ち合わせに来ないから、怒って心配してかけたんだってえ。あー、よかつた。アタシは助かつた。

何処でどう転ぶか分かんないけど、アタシは助かつた。感謝するけどオ、……オッサンは?

オッサンの行方は不明。オッサン、アンタ何処にいんだよ……つ

てこうか……。

もしかして全部、夢だったワケえ？

・・・

数日後、朝刊の紙面には、次のような見出しが記事が書かれていた。

『山中にて白骨化された遺体、発見か』

アタシが退院するまでに穴を調査してくれたらしく、こうしてオッサンは、発見された。

オッサンがアタシに見せてくれた綺麗な『夢』は、本当に綺麗だったのかなア。アタシには、絶対に掘り返してはならない『穴』のように思えて仕方がない。カミサンと息子がいるつて言つてた。しかも夢、あれは秋？ オッサンが遭つた震災つて、いつのこと？ 難しいこと、分かんね。知イらない、アタシ。そこ無関心でいいんじやね？

アリガト、オッサン。アタシ、ゴローと幸せになるわ。

『END』

(後書き)

平成16年10月23日、新潟県中越地震の発生、つと。本作品は、小説家になろう『夏のホラー2011』『夏の夜には怪談を』企画参加作品です。

<http://horror2011.hinaproject.com/>

「」読了ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6111v/>

アナアナ。

2011年8月9日06時31分発行